

危機管理の視点：第 114 回日本病理学会総会ランチョンセミナーご参加の御礼にかえて

原田大輔(一般社団法人 PaLaNA Initiative 理事)

第 114 回日本病理学会総会において、弊法人は正晃テック株式会社との共催により、ランチョンセミナー「遠隔病理ネットワークの使用法のいろいろ」を開催いたしました。ご多用の中、実際に会場まで足をお運びくださった皆様には、心より御礼申し上げます。また、講演終了後のアンケートや直接のお声かけを通じて、多くのご意見・ご感想を頂戴しましたことにも、この場を借りて深く感謝申し上げます。皆様からの率直なご指摘やご提案は、私たちが日々取り組んでいる遠隔病理の運用実践にとって、大変貴重な示唆となりました。なお、当日ご参加いただけなかった皆様におかれましても、本セミナーで使用したスライド資料 (PDF 版) を PaLaNA Initiative の公式ホームページにて公開しております。遠隔病理の多様な活用法にご関心のある方は、ぜひご覧いただけましたら幸いです。

■ 「術中迅速診断時の緊急避難的方法の紹介」とその背景

本講演では、「術中迅速診断時の緊急避難的方法の紹介」として、Whole Slide Imaging (WSI) やネットワークシステムに何らかの障害が生じた場合に、診断業務を継続するための代替的手段をご紹介しました。静止画像や動画を活用した方法、またそれらを一時的に用いる運用例など、現場での知見を共有することを目的とした内容です。講演後には、「そもそもトラブルが起こりうるのであれば、遠隔病理ネットワークは日常運用には適さないのではないか」という懸念の声も寄せられました。こうしたご意見は真摯に受け止めるべきと考えております。とりわけ、遠隔病理ネットワークの実装を現場で検討されている皆様にとって、信頼性と可用性は何より重要な要素です。一方で、私たちが本講演を通じてお伝えしたかった主眼は、「いかに優れたシステムであっても、想定外の事態に備えるための危機管理の視点を持つことが、安定運用の鍵である」という点にあります。

■ 危機管理の基本構造：リスクマネジメントとクライシスマネジメント

システムの安定運用を支えるには、「トラブルを起こさないこと」と同時に、「起こったときにどう対応するか」を常に意識しておく必要があります。これを体系的に支えるのが、リスクマネジメントとクライシスマネジメントという、危機管理の二本柱です。

◎ リスクマネジメント：予防と回避に向けた備え

リスクマネジメントは、潜在的なリスクをあらかじめ洗い出し、発生の確率や影響を分析した上で、それを低減・回避するための継続的な取り組みです。遠隔病理ネットワークの運用においては、以下のような対応がそれに該当します。

- ・ 回線障害や通信不良に備えたネットワーク冗長化 (バックアップ回線の確保など)

- ・ スキャナーやサーバー等ハードウェアの定期点検および更新計画
- ・ データの自動保存や復旧体制の策定
- ・ 操作マニュアルの整備、スタッフ教育・訓練の実施

これらの取り組みは、トラブルを未然に防ぎ、平常時におけるシステムの安定運用を下支えするものです。

◎ クライシスマネジメント：想定外への即応と回復

しかし、どれほど精密な備えを講じていても、すべてのトラブルを完全に予防することは困難です。自然災害、ソフトウェアの不具合、人的な誤操作など、さまざまな「想定外」は、常に起こり得るものです。

このとき必要になるのが、実際に危機が発生した際に、迅速かつ柔軟に対応するための「クライシスマネジメント」です。具体的には以下のような対応が含まれます。

- ・ 静止画像や動画によるなどの、代替診断手段の準備
- ・ 臨床医・病理医・技師間での迅速な情報共有体制の構築
- ・ 優先順位に応じた業務の一時的再配分
- ・ 障害発生時の影響範囲の把握とインシデント報告、対応記録の作成

これらは、単にシステムを「元に戻す」ためだけでなく、診断の中断を最小限にとどめ、現場の信頼性を維持するために必要な行動でもあります。

■ 両者の関係と補完性

リスクマネジメントとクライシスマネジメントの違いと、それぞれが果たす役割を以下に整理いたします。

項目	リスクマネジメント	クライシスマネジメント
目的	リスクの予見と回避	危機発生後の被害最小化と業務回復
タイミング	平常時	非常時(障害発生後)
対象	潜在的なリスク	実際に発生した危機
手段	計画・訓練・予防策	緊急対応・意思決定・復旧策
効果	安定的な運用の実現	組織の耐障害性(レジリエンス)の向上

いずれか一方だけでは不十分であり、両者を併せ持つことこそが、実践的かつ持続可能なシステム運用の要となります。

■ 講演の主旨：「止まっても診断できる」体制づくりへ

今回の講演では、遠隔病理ネットワークが「使用できない場面がある」ことそのものを問題とするのではなく、そのような場面においても業務を継続するための選択肢や運用体制を、あらかじめ準備しておくことの重要性についてお話しいたしました。術中迅速病理診断の現場において、WSIが使用できない状況でも、静止画像や動画配信による診断支援、代替手段への即時切り替えによって業務を継続できることはまさにクライシスマネジメントの実例です。遠隔病理ネットワークという優れた手段の恩恵を最大限に引き出すためには、「常に100%稼働すること」を前提にするのではなく、「万一停止しても機能を維持できる」柔軟な体制を組み込んだ設計が必要です。このためには単なる技術的な課題解決にとどまらず、運用文化・組織体制・人的資源の在り方を含めた包括的な危機管理の構築が求められます。

■ おわりに

遠隔病理は、限られた医療資源を共有し、地域格差を超えて高品質な診療を実現するための重要な取り組みです。これを日常業務に定着させていく上では、リスクマネジメントとクライシスマネジメントを両立させた危機管理体制の構築が不可欠です。今後も皆様の現場と対話を重ねながら、実践に根ざした知見と仕組みを共に築いてまいりたいと存じます。引き続き、ご指導・ご意見を賜りますようお願い申し上げます。